

(それなのに、カセットコンロと土鍋とコーヒーマーカーが増えちゃったなあ)

強く反対しない自分を意識しつつ、そんなことを思い、軽く帝人は肩をすくめる。

恋人ごっこを初めて十日。食器の類もだいたい増えた。それも臨也が調子に乗っておそろいで、などというから二セツトずつ、いろいろ増えた。グラスに大中小の皿、箸にフオークにスプーン。

(でもまあ、全部臨也さんが使う物を臨也さんが買ってるだけだしな。置くのは僕の部屋でただけで)

臨也のマンションにはまだ言ったことはないが、話を聞く限り、かなり広そうだ。きっと帝人の住まうアパートと比べれば別世界そのものに違いない。それこそコーヒーマーカーだのは当然置いてあるのだろうし、改めて買う必要もないのだろう。

その点、帝人の部屋は何もないに等しく、だから臨也は足りないと思えばどんどん買い与えてくる。それでも、臨也が使う物だ、と思えば仕方ないか、と一応納得できる。困るのは衣服の類だ。帝人の服を、それもあり高そうなブランド物を買ってくれようしたり、時計をプレゼントしようとしたりする。

(あとは靴とか鞄とかもあったつけ)

店員と話す臨也へとなんとなく視線を向け、そのときのことを思い出す。

たぶん、と帝人は思う。

たぶん、今まで、臨也がつきあってきた恋人たちに、それらは当たり前でプレゼントだったのだろう。

高い服や装飾品を帝人が望めば、きつと今すぐにでも臨也は買い与えようとするだろう。彼は金銭的余裕がかなりある様子だし、恋人ならばプレゼントするのは当然、と思っている節がある。貧乏学生の帝人とはあまりにも感覚が違いすぎる。帝人にしてみればたとえ恋人でも、そんな風に物をもらうのは何かが違う気がする。誕生日だのクリスマスだの、いかにも恋人のイベントごとならまだわかるけれど、何でもない日にプレゼント攻めにされるのは是非、遠慮したい。

(だってお返しとかできないし)

もらってばかりいるのは性に合わないが、金額的に同じようなものを返すことも難しい。ならば最初からもらわない方が気が楽だし、合理的だ。そもそも帝人には高い衣服も装飾品も必要ない。最低限のセンスさえ保証されていれば、安物で十分だった。

とりあえず、どうにかプレゼントについては懇切丁寧に説明し、渋々臨也は引き下がったが、それでも未だにあれこれと買ってくれようとする。

もはやこれは困った癖だ、と思うしかなかった。それさえ思えば、コーヒーマーカーくらいはまあいいか、と言う気になる。台所の収納部分はまだ余裕があるし、自分は置き場所を提供しているだけでプレゼントされたわけではないのだから。